

「しんかい 6500」運行チーム各位

JAXA（宇宙航空研究開発機構）が月2回配信しているメールマガジンで短いエッセイのコーナーを担当しており、そちらでも書かせていただきました。下記のURLにもアーカイブされていますが、記事を抜粋してお送りさせていただきます。お礼にかえて…。

喜多充成拝

[http://www.jaxa.jp/pr/mail/archiv\\_j/0056.txt](http://www.jaxa.jp/pr/mail/archiv_j/0056.txt)

<□■□□□<=

JAXA メールマガジン 第56号

発行：2007.03.15

《8》宇宙つれづれ —

◆千と千尋の第1000回おめでとう物語

「第1000回」を見届けに石垣島沖に来ています。1989年の就航以来、世界の海を股にかけて、数々の輝かしい発見を成し遂げてきた JAMSTEC（海洋研究開発機構）の有人潜水調査船「しんかい 6500」が、石垣島沖の鳩間海丘という海域で、ちょうど第1000回目の記念潜航を行なっています（支援母船「よこすか」の船上からこのテキストをお送りしています）。

「しんかい 6500」は毎年この時期がオーバーホール整備後の訓練潜航となるため、研究者以外の乗船が可能になります。これまでも毛利衛宇宙飛行士や俳優の緒方拳氏らが乗船しています（オフィスに色紙が飾られていました）。今回用意されていた広報枠の潜航にノンフィクション作家の山根一眞氏の潜航機会が重なり、それが第1000回となったわけです。

この「しんかい 6500」の業績ですが、とてもここでは伝えきれないので他にお任せしますが、現場を見た者としてみなさんにぜひお伝えしたいことがひとつ。それは運航に関わるスタッフのきびきびとした作業ぶりです。

揺れる母船から潜水船を吊って海面に降ろすにはクレーン操作の高い練度が要求されます。浮上してきた潜水船に係留索や吊り上げケーブルを固定するのはダイバーの仕事であり、船上との連携プレーがたいへん重要です。母船に揚がった後も、翌日の潜航に備えての整備や充電が格納庫の中で延々と続きます。

それを眺めながら感じたのは、ここで関わる全員が、自分がいま取り組んでいる作業の意

味と重要性を熟知した上で作業に当たっているのだな、ということです。F1のピットの中や、大きな手術室の中を覗いたことはありませんし、月へ向かう途中に酸素タンクが爆発した宇宙船を救出しようと奮闘する管制室内も映画でしか見たことがありません。ですがそこにもきっと、この整備の現場と同じ種類の空気が流れているのではないかと思えてきます。船の上から直接は見えませんが、海上の現場を支える陸の上のスタッフも、同じ気持ちで当たっているのでしょう。

潜航前の朝のミーティングの後で運航チームのリーダーの今井義司さんに聞いてみました。

「なぜ1000回の節目だが、と言わなかったのですか？」

「“1000回だけど、いつも通りに……”とすら言わなかったのは、ほんとうにいつも通りにやろうという気持ちからです。みんなじゅうぶん分かっていますからね」

素晴らしいチームワークで練度の高い仕事を続けてきた、通過点としての第1000回。心からお祝いしたいと思います。

ちなみに本稿のタイトル、もちろん映画の題名にちなんだものなのですが、偶然の符合を見つけました。「尋（ひろ）」は縄の長さや深さを表す日本語の単位で「一尋」が約1.5m。今回の潜航ポイントが水深約1500mの地点でしたから、ちょうど「千」回目が「千尋」となったわけです。たまたまではありますが。

(MK)

